

石斧の考古学

まほろん館長 石川 日出志

【内容のあらまし】 私たちは、斧と言えば鉄斧を思い浮かべますし、斧（おの）という言葉も金属製を念頭に置いているようです。しかし石斧は、文字も金属器も登場するより前の先史時代の資料であり、モノ自体をどう認識するかから石斧の研究は始まりました。そうした研究の初期の様子や、日本列島における磨製石斧の登場の不思議、磨製石斧をどのように観察するのか、どのように柄に装着して用いたのか、などについてご紹介します。

0. 宿題の回答

- ・前回講演で、日本の古代のロクロ利用土器づくりでは、ロクロ右回転が圧倒的多数だと話しました。講演後に会場から「朝鮮半島などでは左回転が多いと聞いたことがあるがどうか」と質問があり、宿題としましたので、回答します。
- ・漢代楽浪郡の土器を詳細に観察した鄭仁盛氏が、左回転が多い（44例中36例）と報告していました（鄭仁盛 2003「楽浪円筒形土器の性格」『東京大学考古学研究室紀要』第18号, pp.137-162）。

1. 石斧をどう考えるか

（1）斧（おの）に関する漢字と倭（和）語 【1-上】

- ①. 漢字（斤・斧・鉞）： 甲骨文字に由来＝青銅製の斧に始まる
- ②. 倭語（おの・ちょうな・まさかり・よき）： 鉄製の斧を呼ぶ語
→ 金属器が登場する以前の石斧はこれらの語で表してよいのか？ 正確には「斧形石器」だが、大枠として「斧（おの）」の語を用い、「石斧（いしおの・せきふ）」と呼ぶ。

（2）石斧の探求―「雷斧」から石斧分類へ― 【2】

- ①. 江戸時代：木内石亭 1773・75『雲根志』、藤貞幹 1792-97 頃『集古図』に「雷斧」
 - ・本草・博物学的関心から石器類の収集・注目。藤貞幹『集古図』では、斧と認識して刃部の形状を平面・側面図で示すように、人為物を視野に入れながらも、石器時代という認識が芽生えていないため、「雷斧」と呼ぶ。
- ②. 明治期：科学的方法による石器研究が始まる。
 - ・「科学的」＝形態・大きさ・材質など基準を明示して分類・記述して体系化を図る。
 - a) 神田孝平 1884『日本大古石器考 Notes on Ancient Stone Implements, &c., of Japan』
 - ・「石器世期」（石器時代）と認識。形状（楔や鑿）・大きさ・素材をもとに分類。
 - ただし「雷斧・雷槌（つち）」と呼び、「闘争または武威を示す」器具とする点は、江戸時代以来の認識から抜け出していない。
 - b) 大野雲外（延太郎）1906「石斧の形式に就て」『東京人類学会雑誌』240
 - ・「磨製石斧」を、平面形、（縦・横）断面形、刃部形態（蛤刃・片刃）から7分類し、石材と分布との相関を読み解く。
 - 鉄斧類と対比して理解するのではなく、石斧をそれ自体の特徴で分類し、その分類単位ごとに分析を進める方法が確立。石器分類学の始まりとして重要。

③. 20世紀初め：縄文式土器と弥生式土器の区分が明確になると、弥生式土器にも石器が伴い、それが大陸に類例があると分かる。 【3】

a) 弥生式土器にも石器が伴う： 鍵谷徳三郎 1908「尾張熱田高倉貝塚実査」『考古界』7-2

b) 鳥居龍蔵 1917「畿内の石器時代」『人類学雑誌』32-9： 弥生式土器には、挟入石斧（現在の挟入柱状片刃石斧）など、縄文式の石器と異なる特徴があり、その類例は大陸にある。弥生時代土器の使用者は大陸に由来する「固有日本人」と主張。

→ 縄文時代人と弥生時代人が異なる人間集団とみる見解で、現在まで議論となる課題を提示した。

2. 世界の石器時代史の中の磨製石斧

（1）世界の石器発達史： 旧石器時代に磨製石斧はない。

①. 旧石器時代： 打ち割る原石の芯を用いる石核石器から、原石からいったん石核をつくり、そこから剥ぎ落とした石片（剥片）を素材として石器をつくる剥片石器へ。石核石器に handaxe（握斧）があるが石斧ではない（万能石器）。

②. 新石器時代＝磨製石器が登場した時代。

・ J.ラボック（Lubbock）1865『先史時代 Prehistoric Times』による新石器時代の定義。

・ 東アジアの実例： 中国河姆渡遺跡（BC5000 頃）：石器時代に柄穴結合法が。【1-下】

（2）日本列島の旧石器時代には磨製石斧がある！ 【5・6】

①. 群馬県岩宿遺跡 1949-50 年調査： 【5】

日本で最初の縄文時代以前の人類文化を実証。旧石器時代と主張するも、H.Breuil ブリュイは磨製石器があるから新石器時代だと否定。

・ 杉原荘介 1956『群馬県岩宿発見の石器文化』明治大学文学部

・ 安藤政雄 1975『『岩宿報告』についての海外からの論評ーブリュイ氏とボルド氏の考えー』『駿台史学』36

②. 現在では、日本列島の後期旧石器時代初めに多数の発見例がある。【6】

→ そもそも後期旧石器時代は多数の骨角器に研磨技術を駆使することに注目すべき。

3. 磨製石斧を読む

（1）縦斧・横斧とその判別 【7】

①. 縦斧と横斧： 【7-A】

・ 刃（刃線）が柄とほぼ平行する縦斧、ほぼ直交する横斧。

・ 基本的に縦斧は伐採斧、横斧は加工斧だが、絶対的ではない。

②. 両刃（蛤刃）と片刃： 【7-A～C】

・ 両刃＝石斧の刃の両面がほぼ左右対称のもの。そのうち刃の丸みが強いものが蛤刃。）一方、刃の両面が左右非対称なのが片刃。蛤刃・片刃は弥生時代に明瞭。

・ 片刃のほとんどは横斧だが、両刃は縦斧・横斧ともある。大きさも関係する。

③. 判別法： 【7-B～D】

a) 柄に斧が装着されて出土： ほとんどが伐採用の縦斧。柄孔に装着されるため。

b) 石斧に着柄の痕跡が残る： Cは、火災による煤で、片面に紐かけ痕、もう片面に斧

台部に密着した痕跡が残り、横斧と分かる。

- c) 刃部の使用痕のよる： 縦斧は、使用による擦痕が、斧刃の両面にほぼ均等につくのに、横斧は刃が平坦な面に擦痕が顕著。

(2) 縄文草創期の神子柴型石斧： 【8】

- ・日本列島では後期旧石器時代初めに多数見られた磨製石斧はいったん姿を消したのち、縄文時代草創期に再登場する。
- ・刃部周辺を研磨する丸のみ形の横斧。

(3) 縄文・弥生時代の磨製石斧の製作と使用： 【9】

①. 製作過程：

- 石核部素材： 原石→→→→→→打ち欠き成形→敲打整形→研磨
- 剥片素材： 原石→剥片づくり→打ち欠き成形→敲打整形→研磨
- ・研磨は、石斧を右手で持って研ぐ例が多数。

②. 使用による石斧の破損

- ・頭部側残存（＝刃部側欠損）と破損した刃部側
- ・刃部の破損 → 軽微であれば研磨し直して刃部を再生する。

(4) 着柄を考える

①. 斧柄に石斧が遺存した実例 【7-B】

- ・ほとんど縦斧（前掲）

②. 様々な斧柄と着柄法 【10】

- ・縦斧と横斧： 柄孔に挿入するもの以外は紐巻きによる結縛が必須。
- ・紐巻きによる結縛の具体的方法は不明な点が多い 【7-C】

③. 民族資料の観察が重要 【11】

- ・発掘資料では判断が難しい紐巻き結縛法の多彩な実例！
- ・モノ研究が盛んな日本考古学なのに、世界の民族資料への関心が不足と感じる。

④. ではこんな石斧（独鋸形両頭石斧）はどのように着柄したのでしょうか？ 【12】

- ・ヒント： 中央に鐙（つば）状の突起2条が一周し、その間は敲打痕のざらつきを表面に残してある。

4. 石器の終焉—石斧から鉄斧へ—

(1) 利器の素材に基づく考古学の時代区分「石器時代→青銅器時代→鉄器時代」

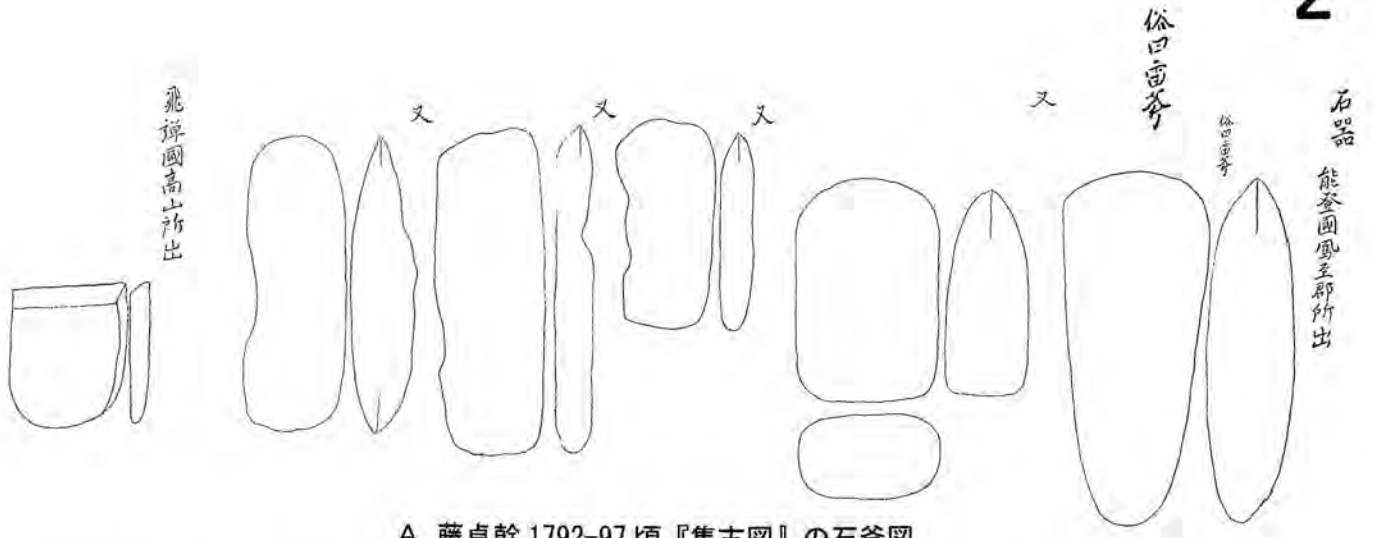
- ・C.J.トムセン(Chritian Jurgensen Thomsen)：1832『北欧古代学入門』で発表。

(2) しかし日本列島では、弥生時代に、石器時代から鉄器時代へと移行（青銅器時代を欠く）

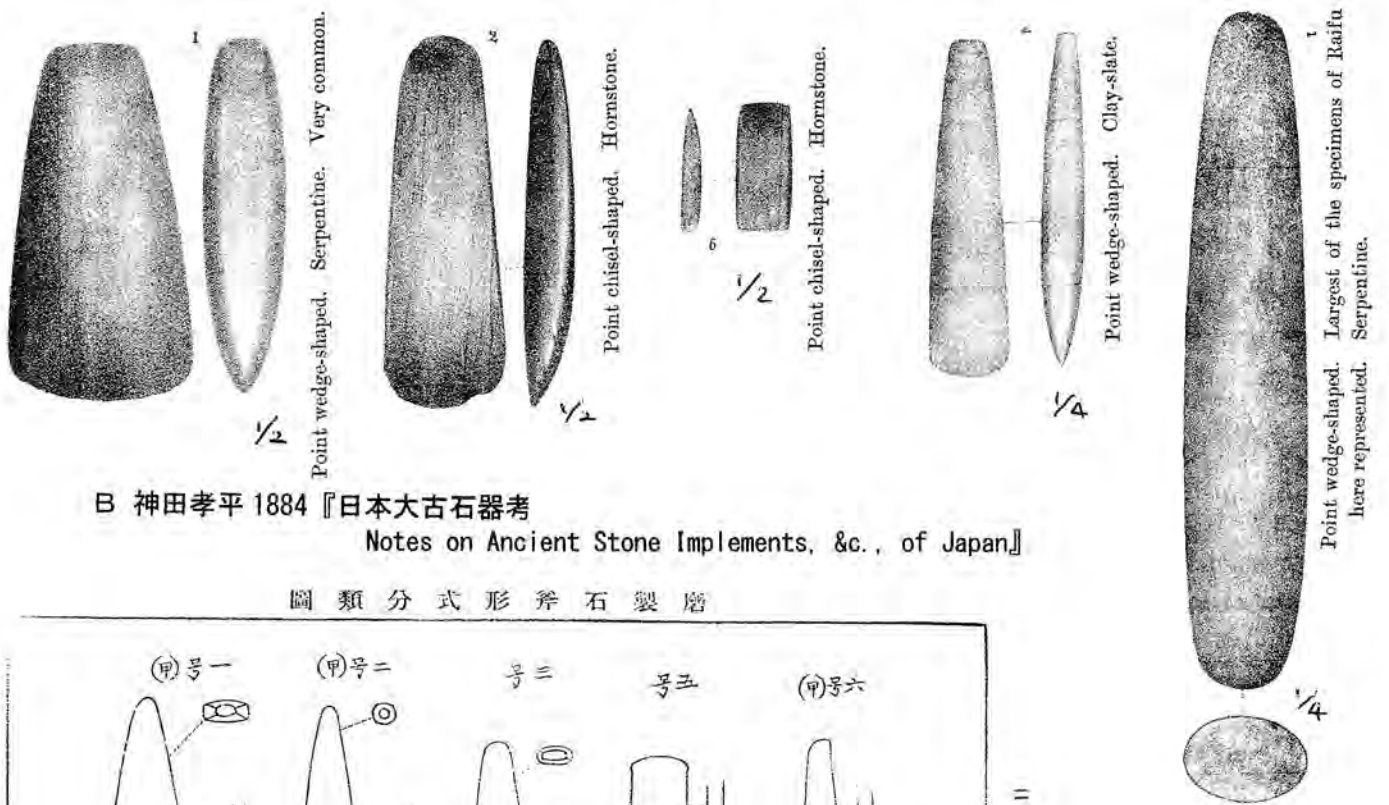
- ・弥生前期末～中期初めに、中国・燕の鑄造鉄器が朝鮮半島経由でもたらされる。【13】
- しかし、鑄造鉄斧が破損してもつくり直す技術がなく、鉄斧片を研いで刃をつけた。
- ・後期には石製の利器はほとんど鉄器に置き換わる。東北地方でも弥生後期に石鏃などは残る（石斧はない）が古墳時代前期には石器はまったくなくなる。

〔参考文献〕

- ・佐原 真 1994『斧の文化史』UP 考古学選書 6, 東京大学出版会



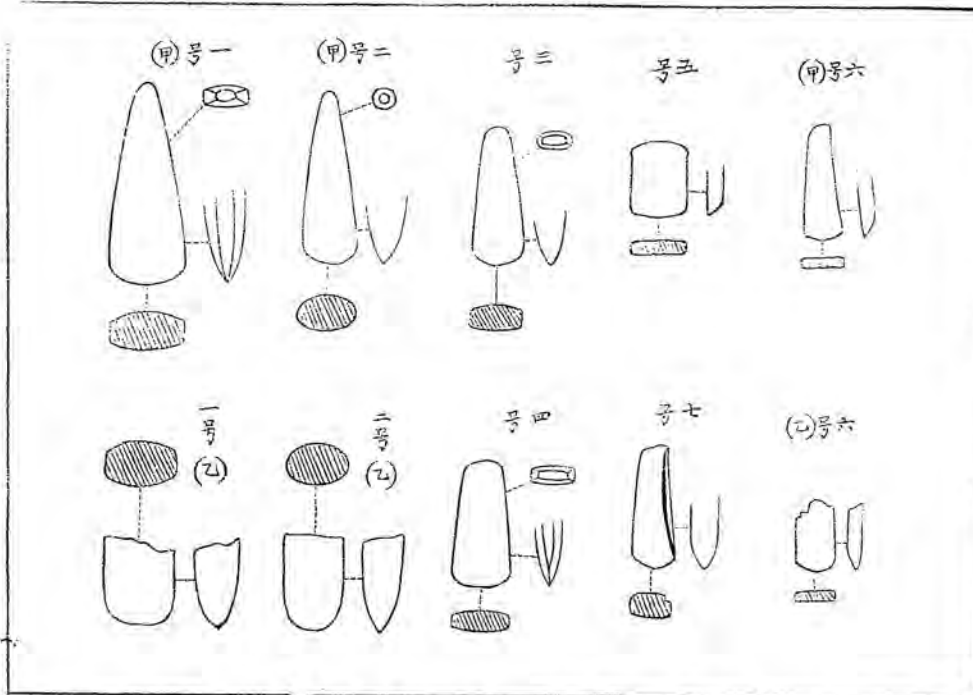
A 藤貞幹 1792-97 頃『集古図』の石斧図



B 神田孝平 1884『日本大古石器考

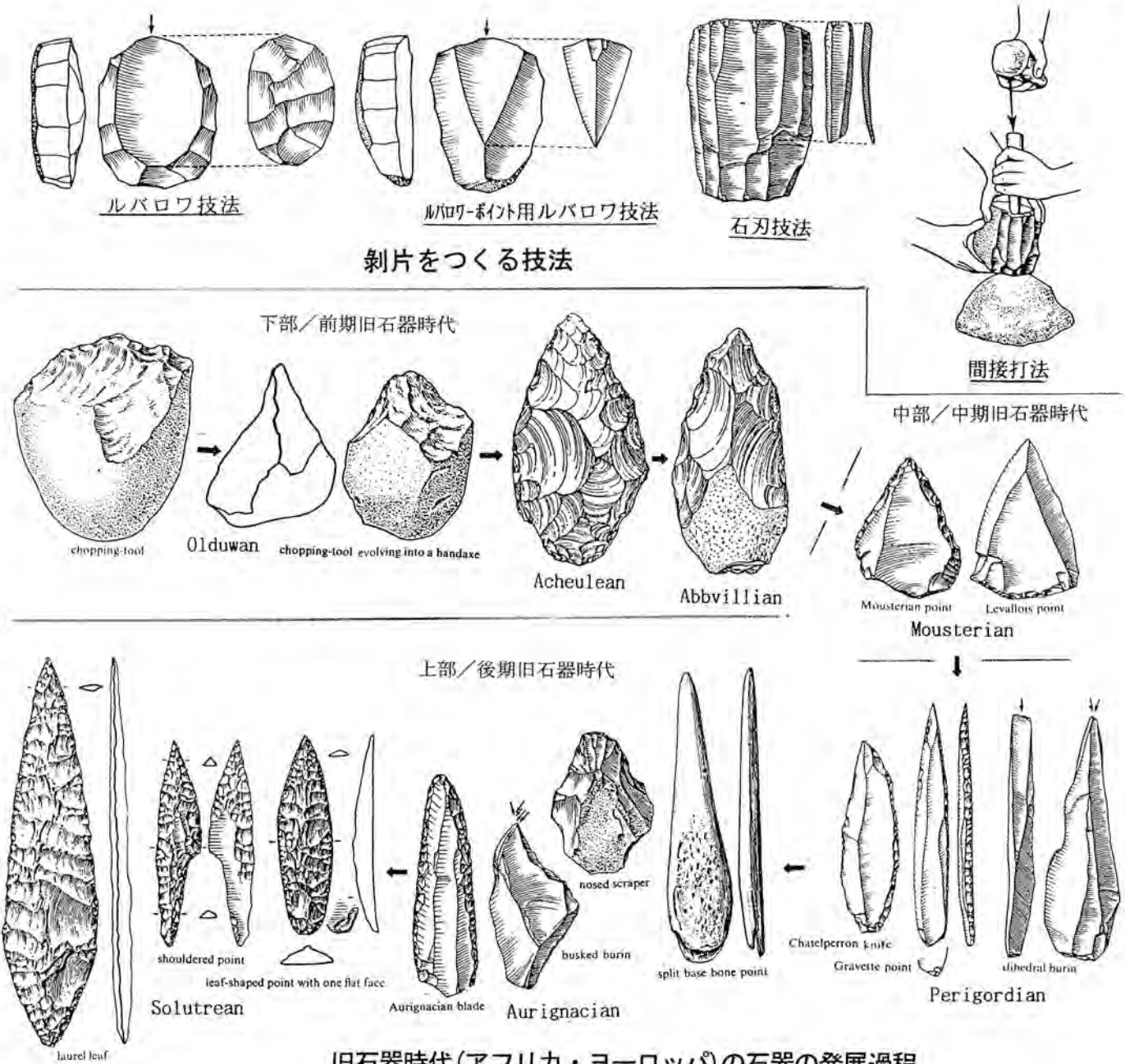
Notes on Ancient Stone Implements, &c., of Japan』

磨製石斧形式分類圖



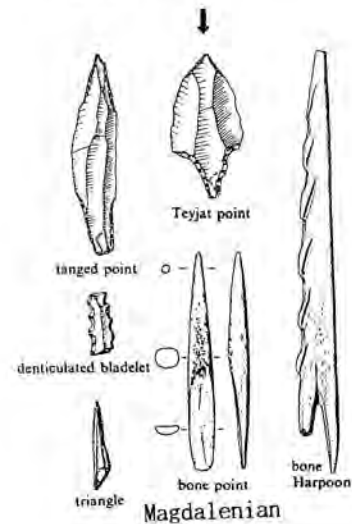
C 大野雲外 1906「石斧の形式に就て」『東京人類学会雑誌』240

石斧をどう認識＝分類するか？



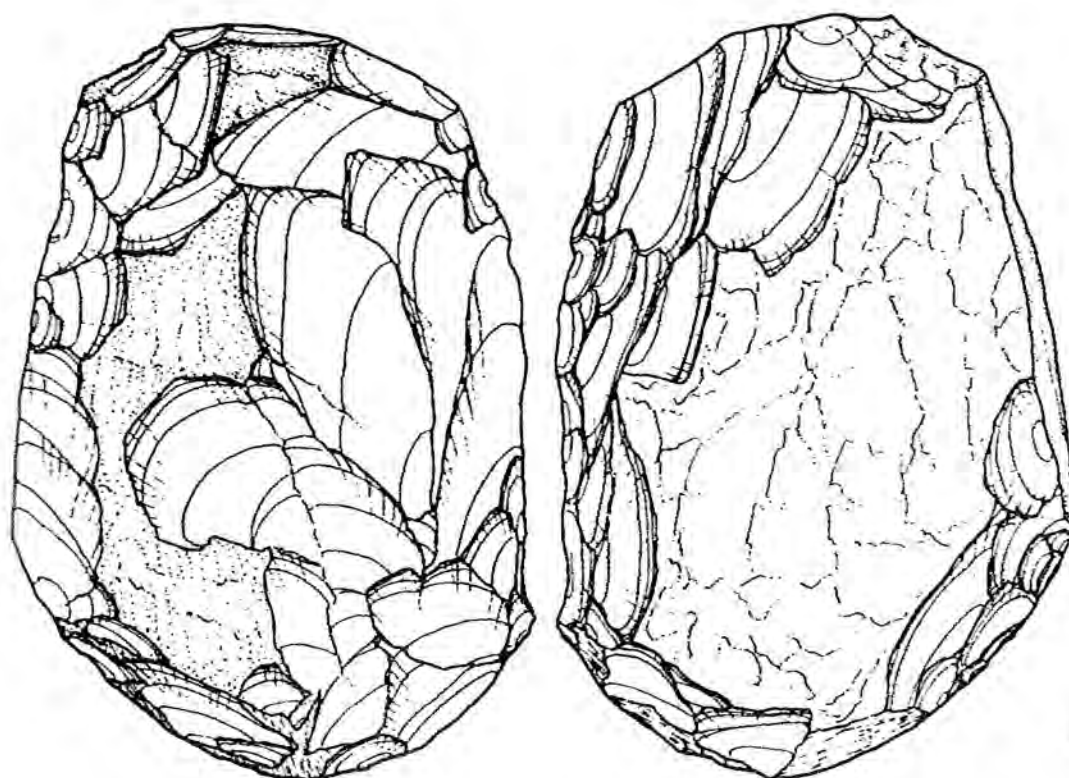
旧石器時代(アフリカ・ヨーロッパ)の石器の発展過程

(F. Bordes 1968 *The Old Stone Age*)



時代区分	人類	第四紀地質年代区分		実年代
鉄器時代		完新世		
青銅器時代		後水期		10,000
新石器時代 中石器時代	上部	更新世	後期	ウルム氷期
	中部		中期	リス/ウルム間氷期 リス氷期 ミンデル/リス間氷期 ミンデル氷期
	下部	更新世	前期	ギュンツ/ミンデル間氷期 ギュンツ氷期
				ドナウ氷期
石器時代	旧石器時代			500,000 1,000,000 2,000,000

時代区分対応表

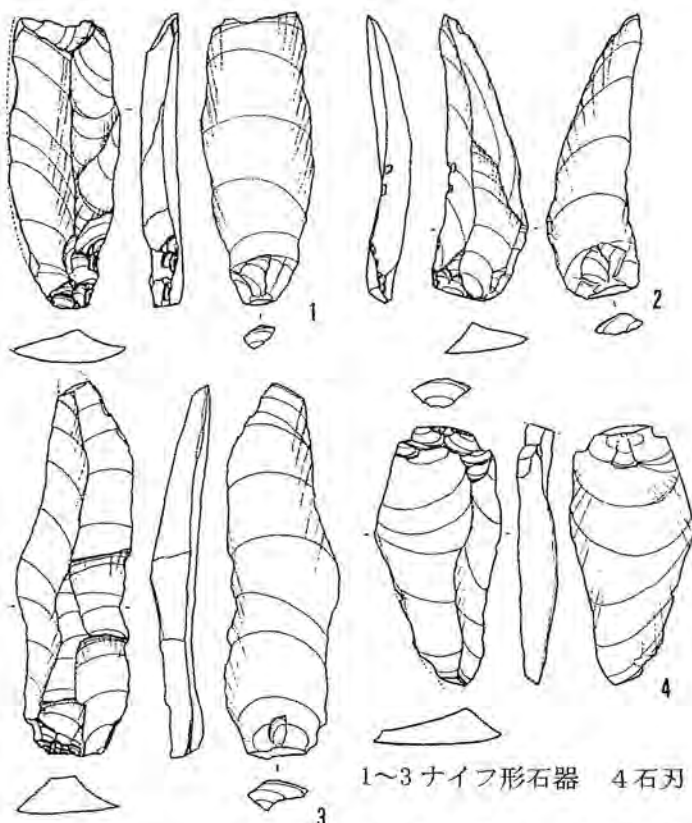
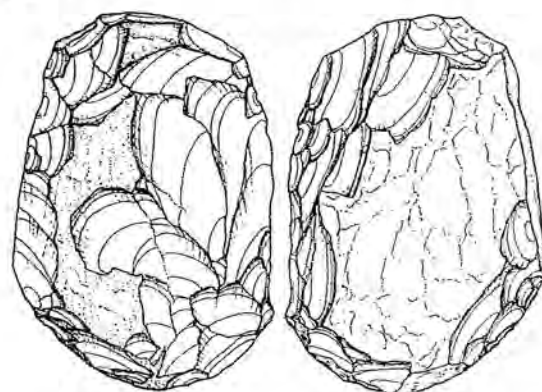


S=1/1

5

S=1/2

刃部両面に明瞭な研磨痕



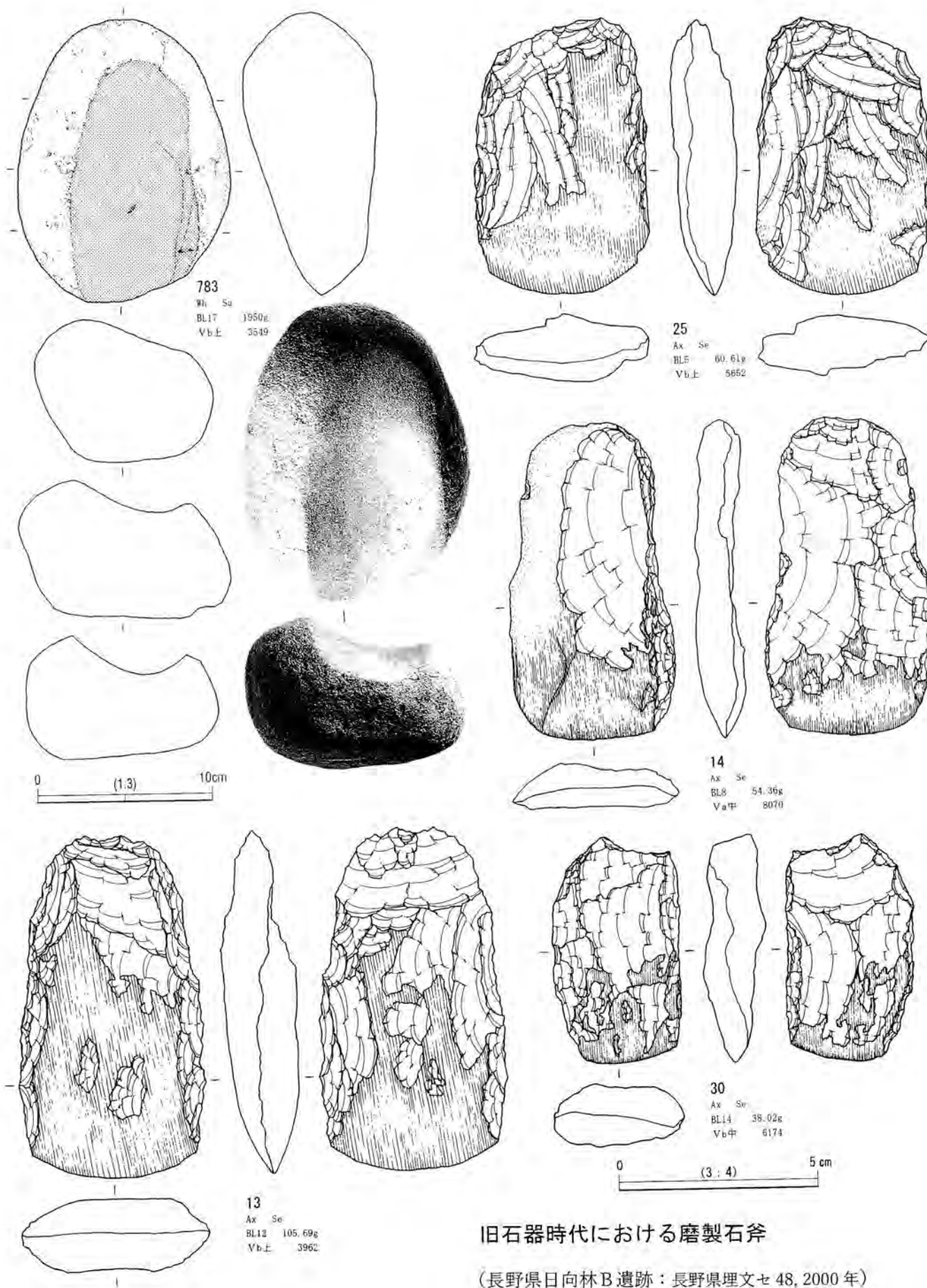
1~3 ナイフ形石器 4 石刃

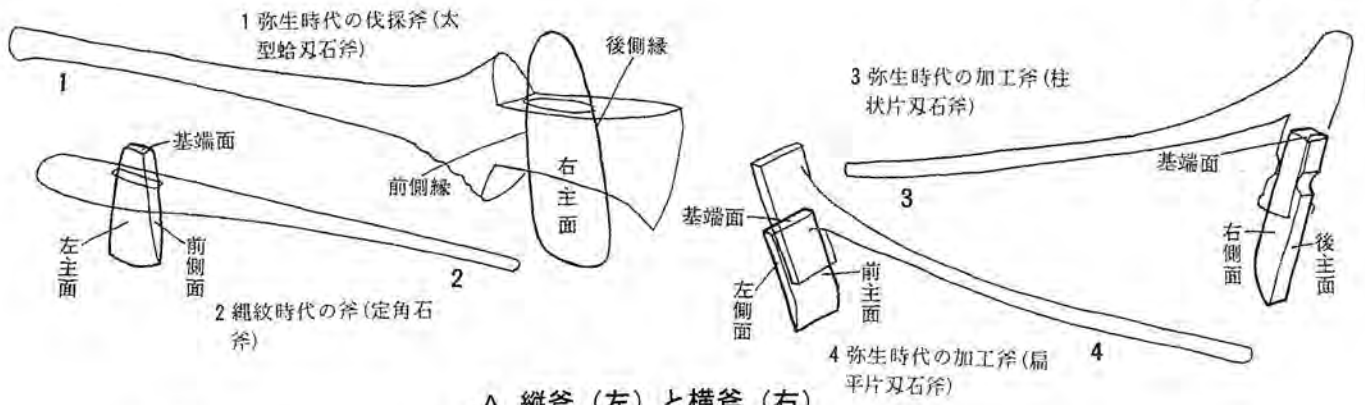


S=1/2

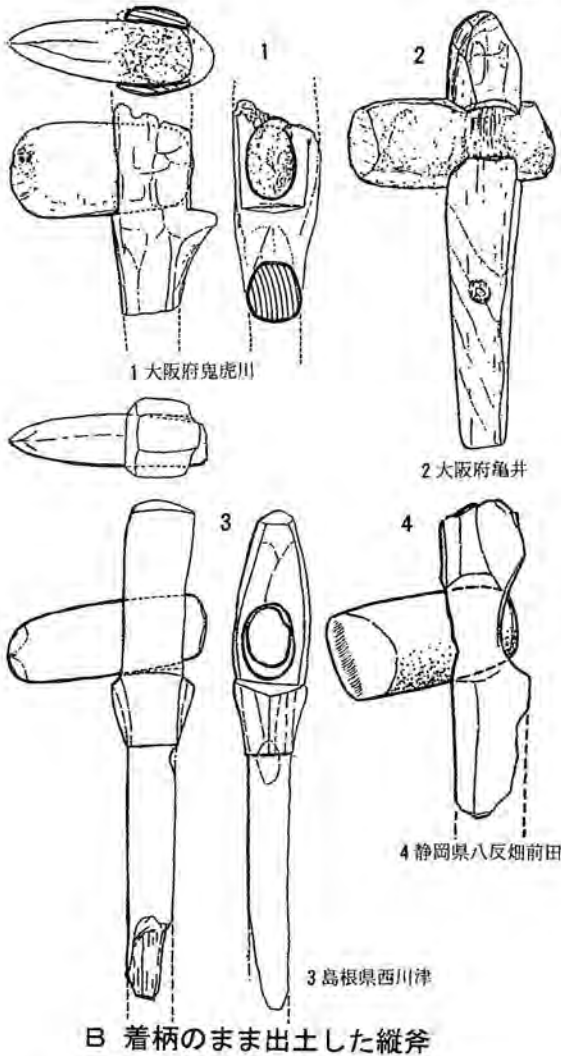
群馬県岩宿遺跡の「岩宿Ⅰ石器文化」の石斧 (5・6)

(須藤隆司 1987「岩宿遺跡」『明治大学考古学博物館展示図録』)

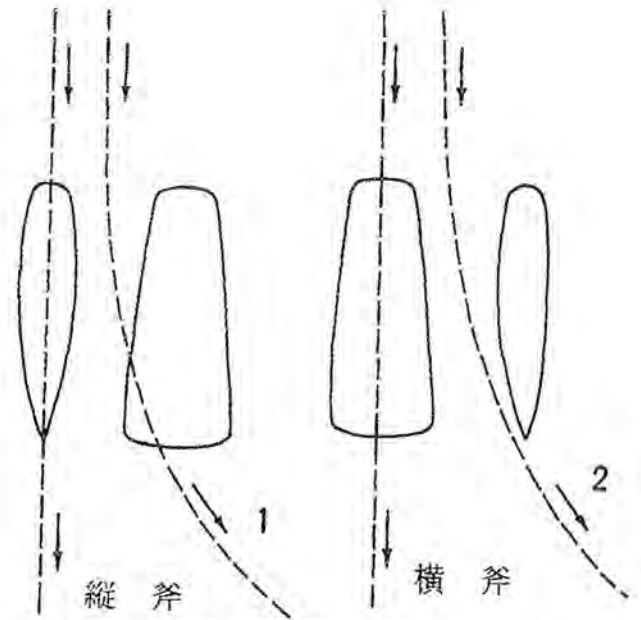




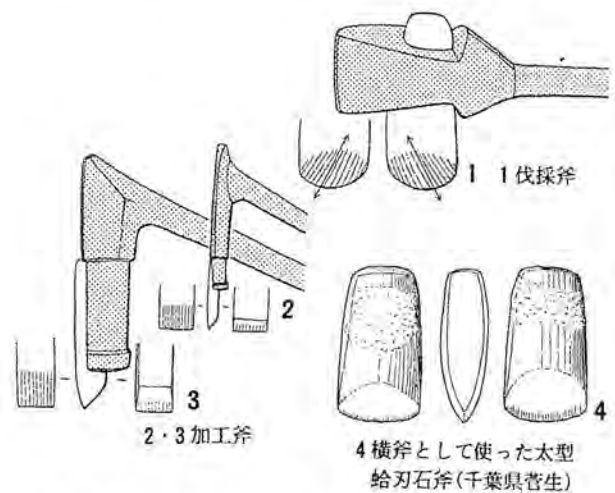
A 縦斧（左）と横斧（右）



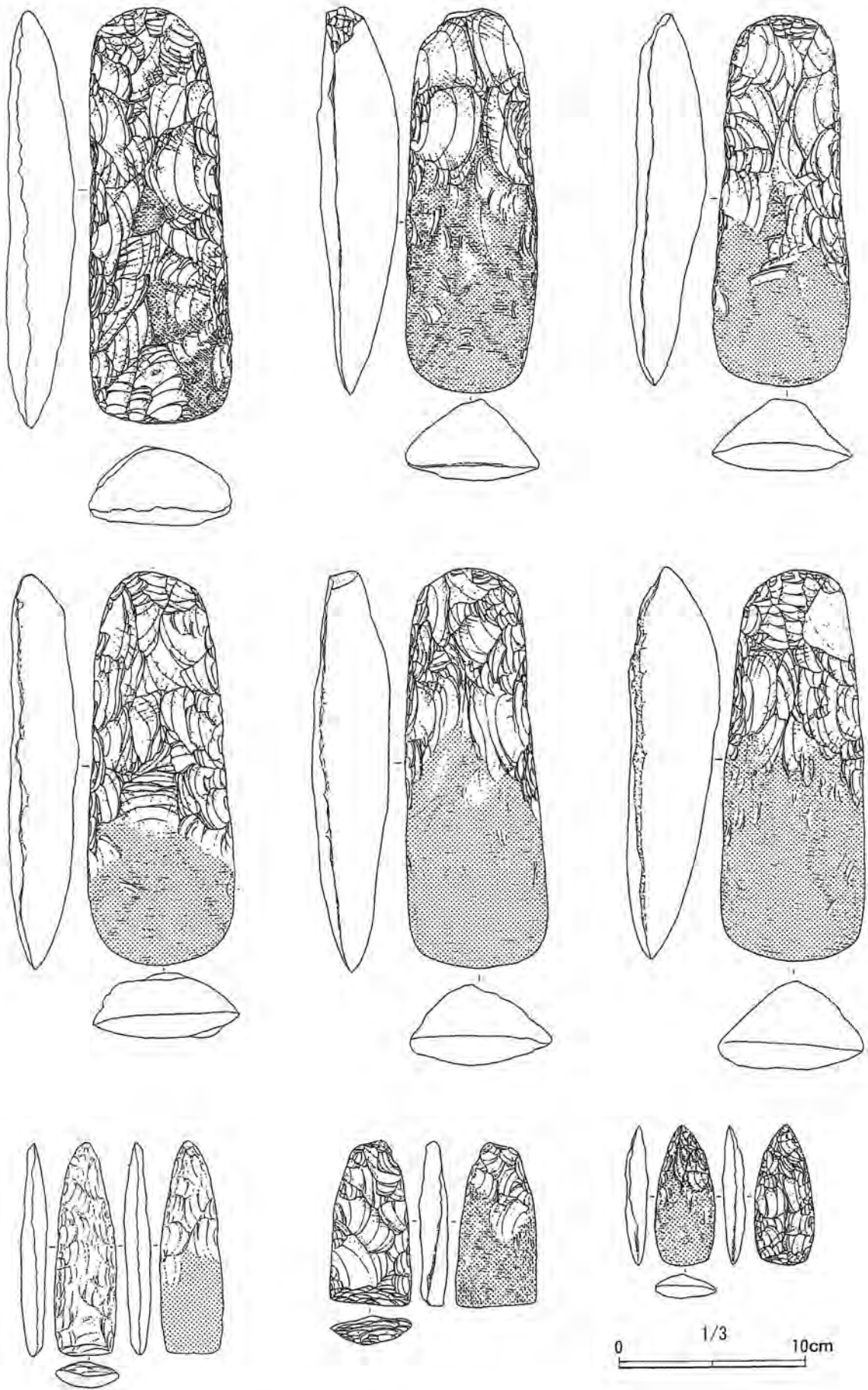
C 着柄のまま煤けて横斧と分かる例



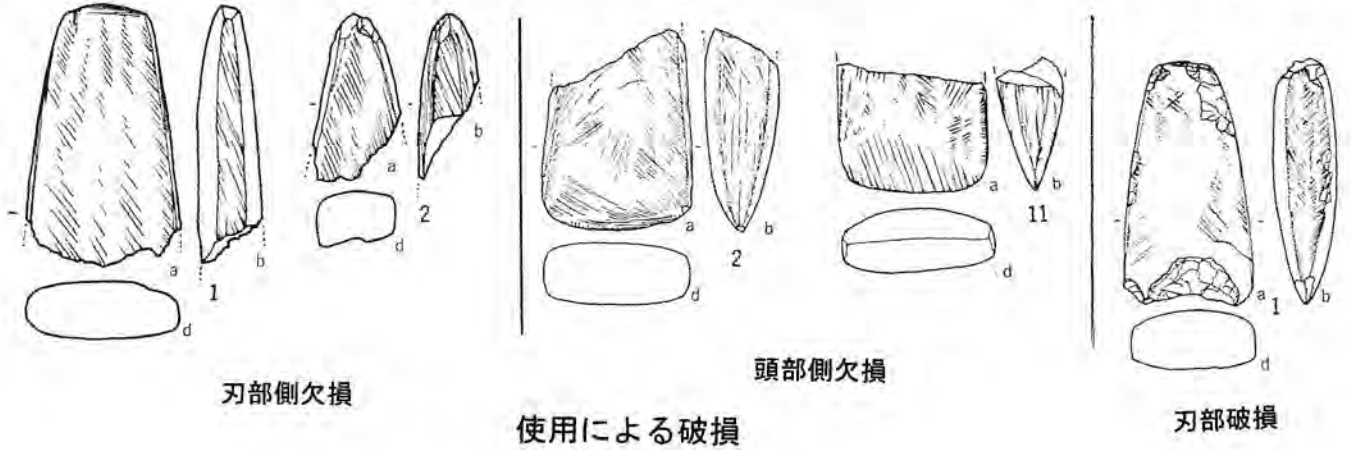
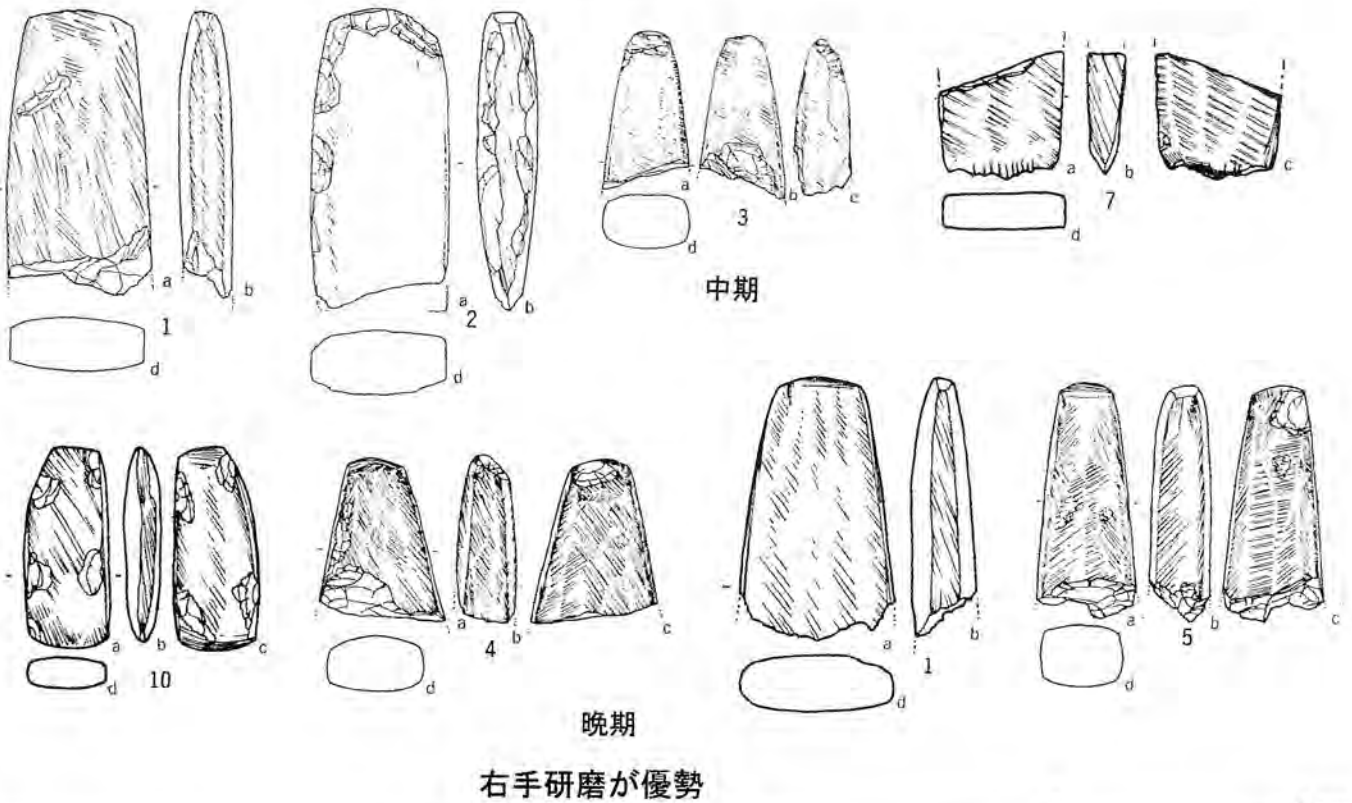
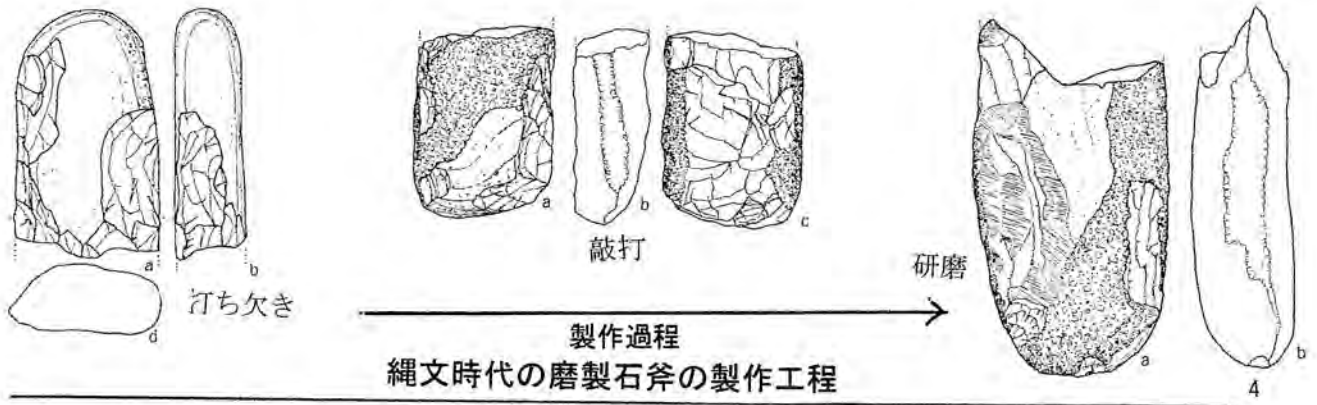
D 縦斧・横斧の使用時の動きと使用痕



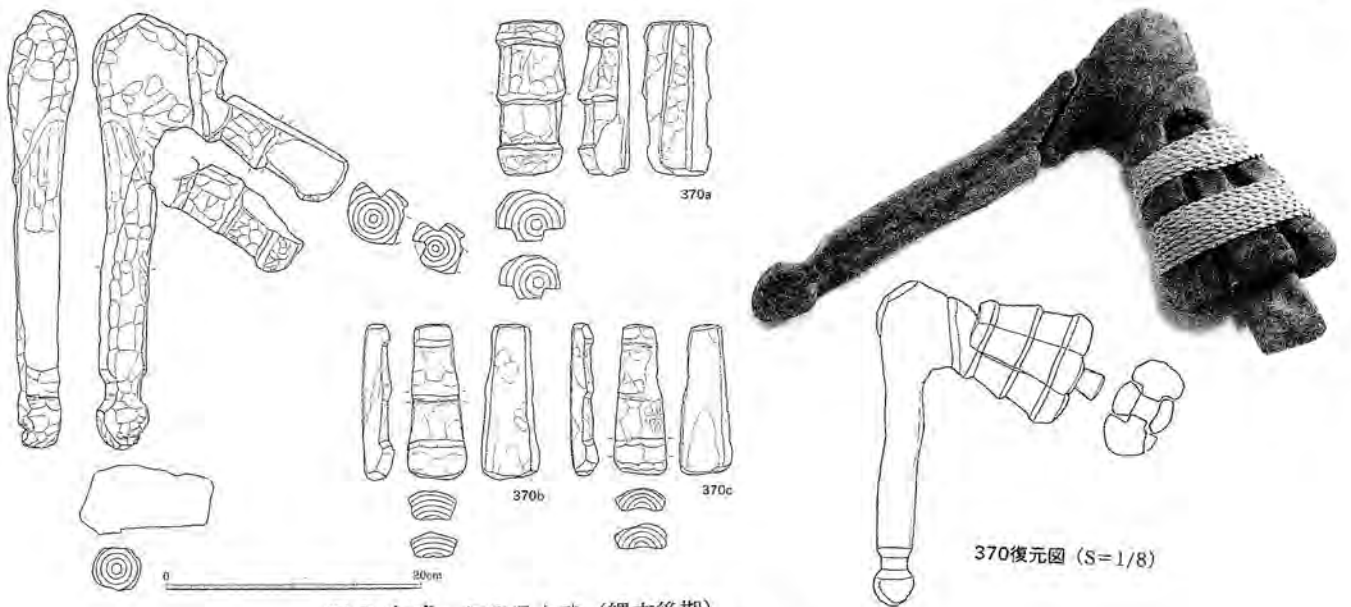
E 刃部使用痕による縦斧／横斧の判別



長野県 神子柴遺跡の局部磨製石斧 (林茂樹編 2008『神子柴』信毎書籍より転載)



縄文時代の磨製石斧の製作工程（上），右手研磨が優勢（中），使用による破損（下）
 （阿部朝衛ほか 1987『寺地遺跡』新潟県青海町教育委員会）



添え木式：新潟県大武（縄文後期）
（春日真実ほか 2014『大武遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会）



様々な斧柄

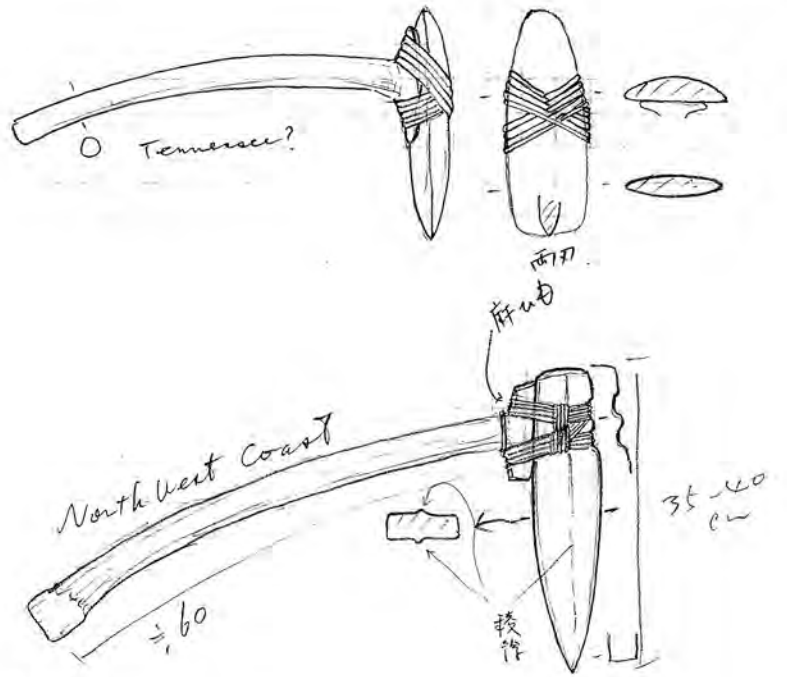
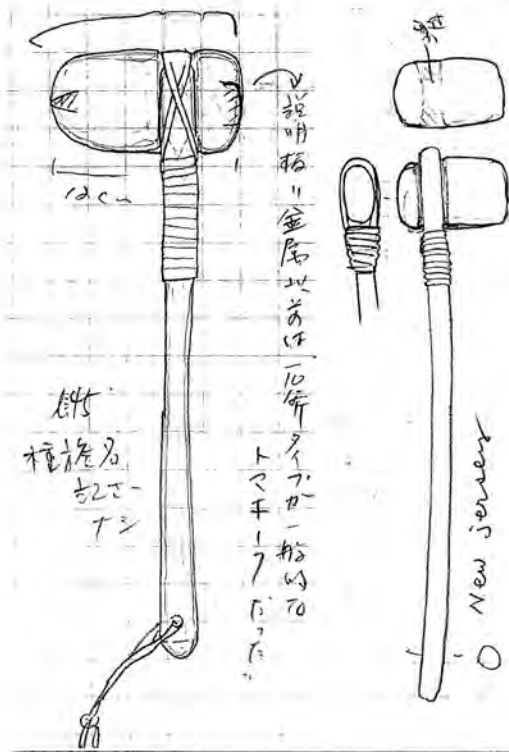
（上原真人 1993『木器集成図録近畿原始篇』奈良国立文化財研究所）

伐採斧
（太形蛤刃石斧）

加工斧
（挟入柱状片刃石斧）

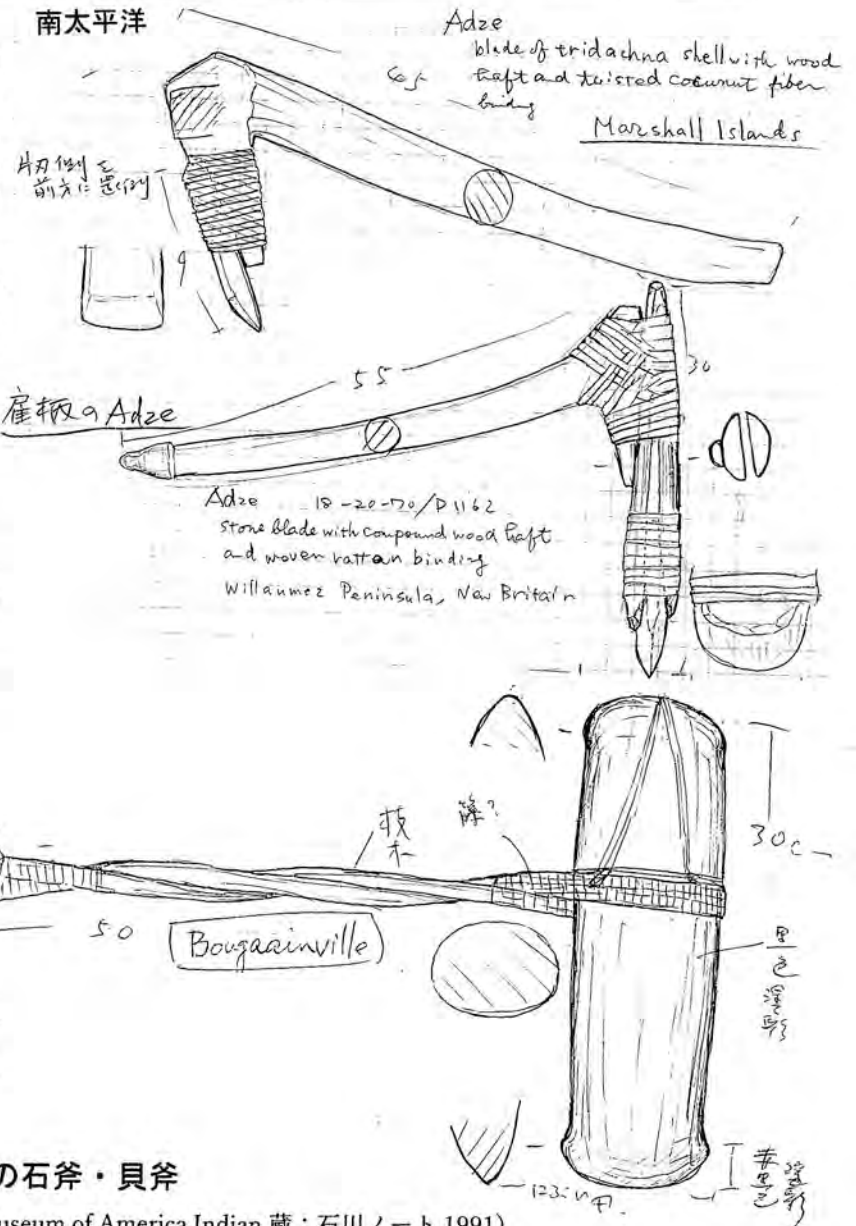
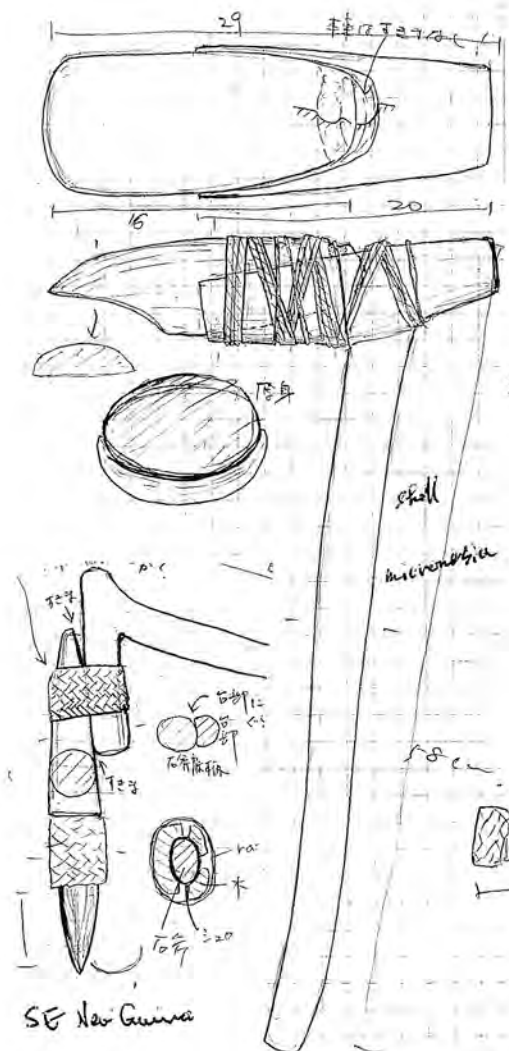
加工斧
（扁平片刃石斧）

弥生時代石斧3種（1992『図解日本の人類遺跡』）



北米

南太平洋

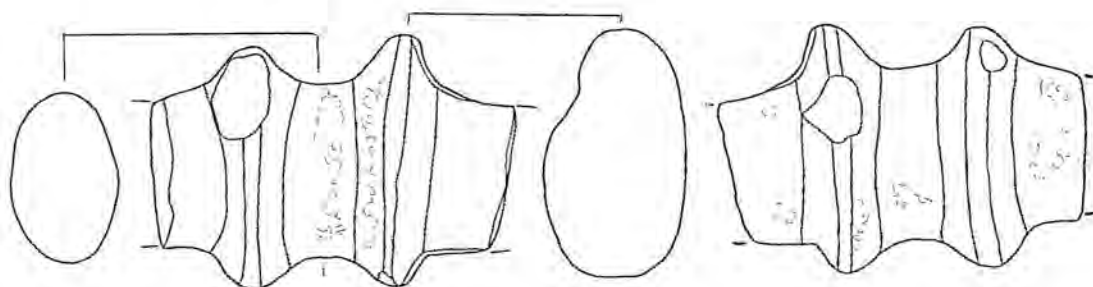


北米と南太平洋の石斧・貝斧

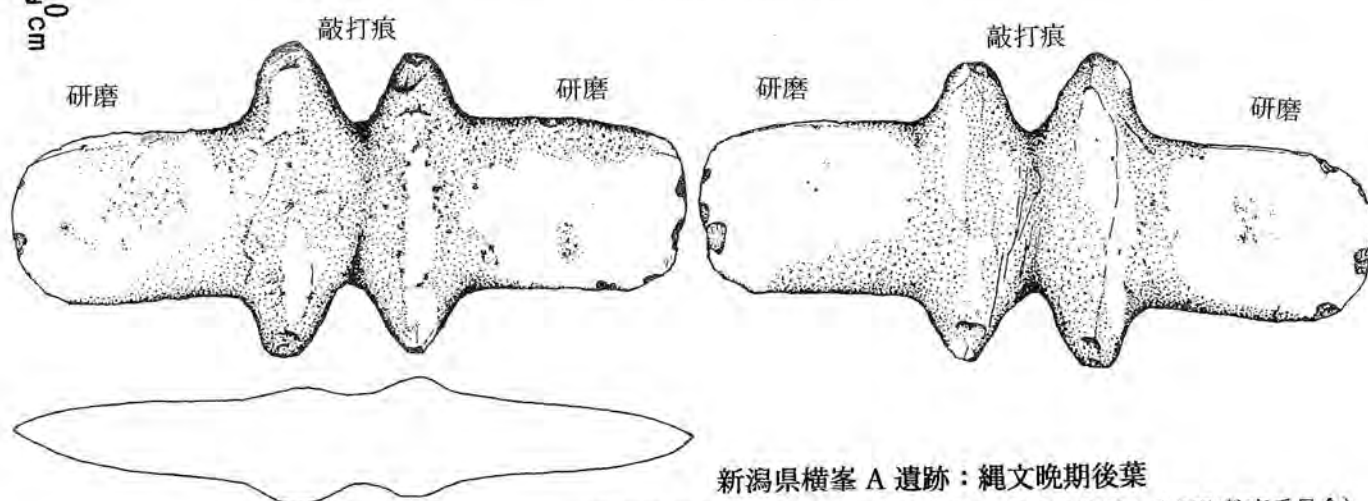


三島町小和瀬遺跡：縄文晩期後葉

(吉野滋夫 2022『小和瀬遺跡』福島県教育委員会)

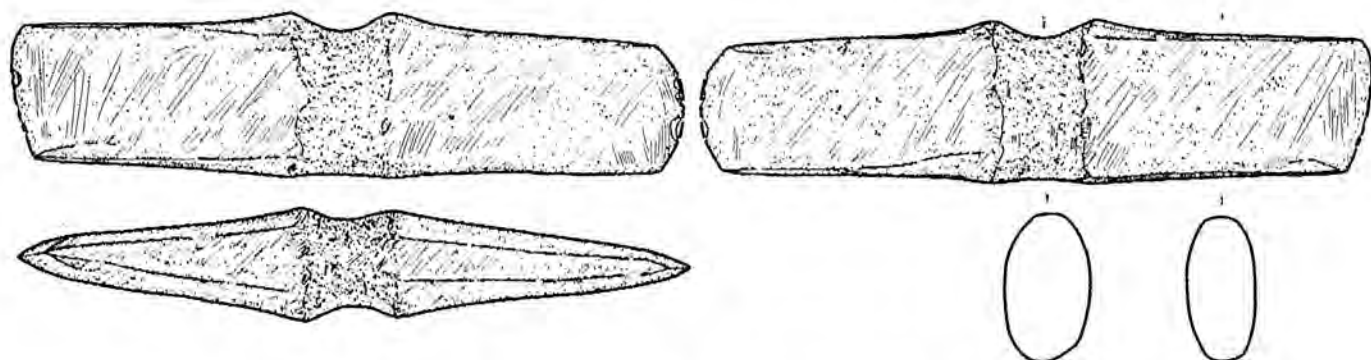


三島町小和瀬遺跡



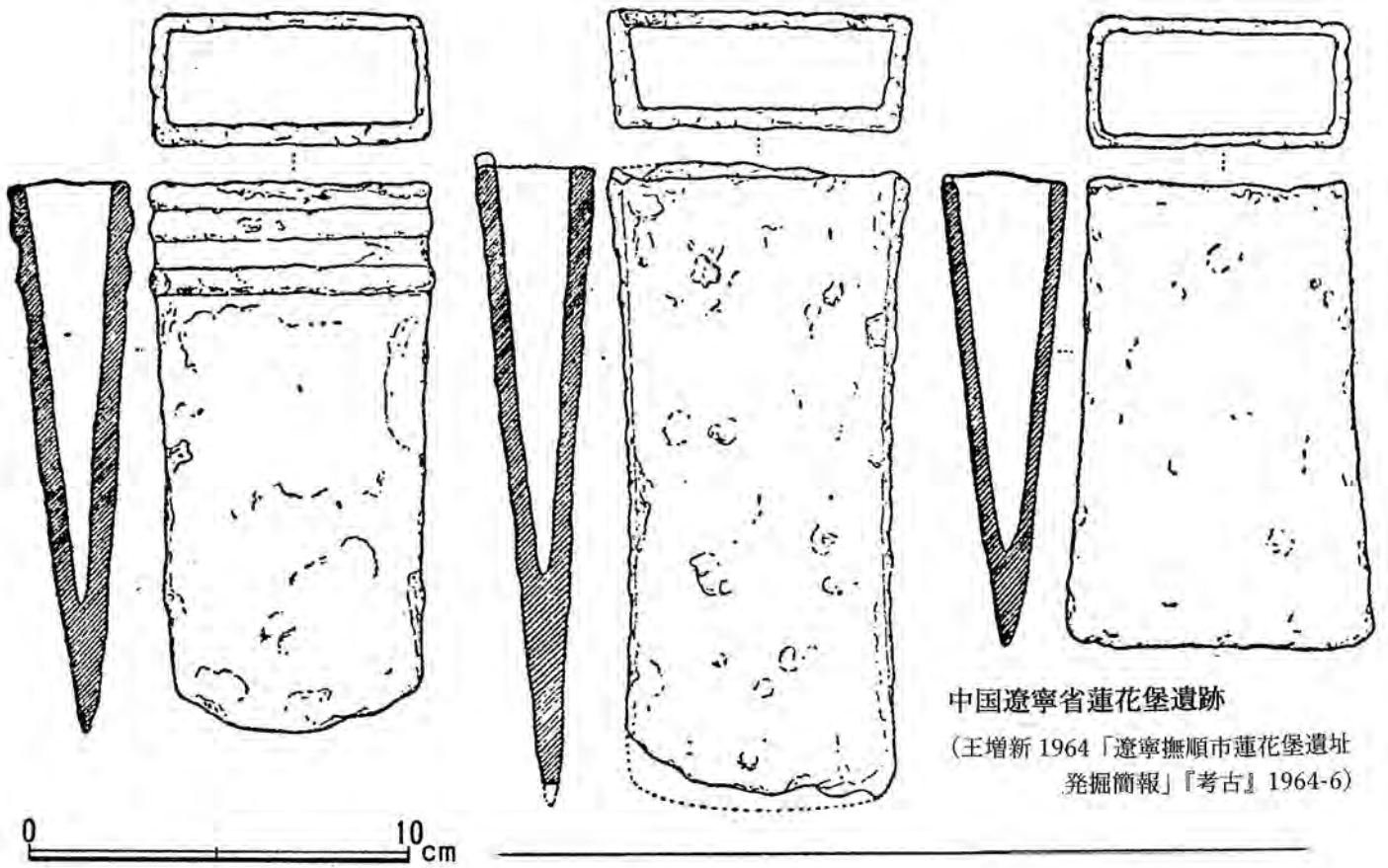
新潟県横峯 A 遺跡：縄文晩期後葉

(石川日出志ほか 1981『横峯 A 遺跡・横峯 B 遺跡』安田町教育委員会)



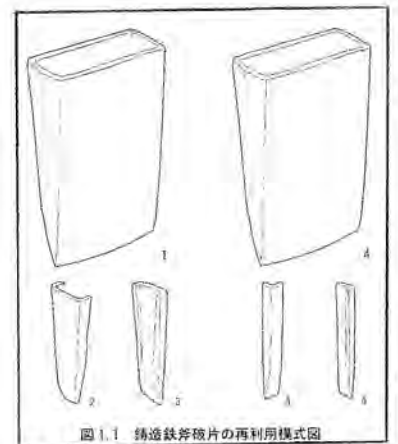
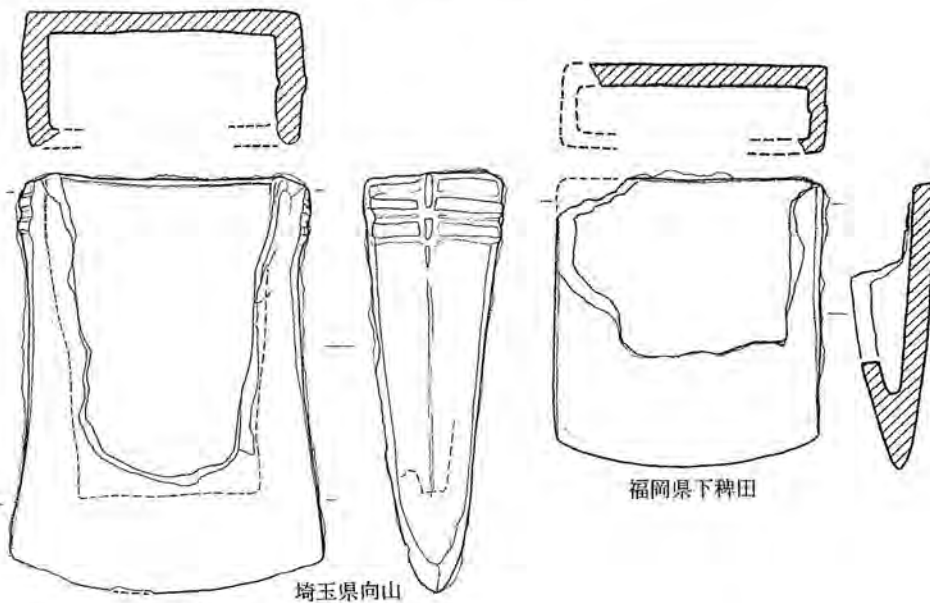
群馬県国衙下辻遺跡：弥生中期後葉 (壁伸明 2010『国衙下辻遺跡』安中市教育委員会)

独鈷形の両頭石斧はどのように柄に装着したのか？



中国遼寧省蓮花堡遺跡

(王增新 1964「遼寧撫順市蓮花堡遺址
発掘簡報」『考古』1964-6)



(野島永 2008『弥生時代における初期鉄器の舶載時期とその流通構造の解明』科研費報告, 広島大学)

中国・燕系統の鑄造鉄斧が弥生時代中期初め頃にもたらされる